

アンチ・アクション ―戦後日本美術を見つめ直す試み―

大阪大学大学院人文学研究科准教授

中嶋 泉

なかしま いずみ



第2次世界大戦後、日本では多くの女性の美術家が新しい表現に挑み、抽象表現や素材の実験で興味深い制作を行っていた。焼け跡からの復興とともに文化の再建が進む中、美術の世界でも自由や創造という言葉が時代の希望を象徴していた。女性たちはその流れに自ら応答し、絵画や彫刻を通じて、戦後社会における人間のあり方を探ろうとしたのである。展覧会や公募展で活躍する彼女たちの作品は、当時の前衛的動向の中に確かに存在していたが、後に語られた戦後美術史の記述ではその姿が見えにくくなった。多くの作品が美術館の収蔵庫に残りながら、実際に鑑賞できる機会は限られている。

その一因となったのが、アクション・ペインティングやアンフォルメルといった絵画運動に付随して現れた「アクション」という概念である。行為を表現の

中心とするこの言葉は、戦後の自由や主体の回復を示す批評的キーワードとして強い魅力を放った。しかし同時に、それは力強さ、衝動性、男性性といった身体イメージを伴い、芸術の価値を限られた基準に収束させていった。アクションはやがて重要な表現理念として美術批評を席巻し、戦後の表現を理解する基盤となっていた。表現が多様化した時代でありながら、その多様性が再び見えにくくなった背景には、この言説に代表される芸術解釈の縮小がある。「アンチ・アクション」という考え方は、この構造を批評的に読み替えるためのものである。「アンチ」は対立を意味するのではなく、行為をめぐる言葉の限定性をほどこき、その外にある実践を見えるようにする視座である。1950～1960年代の女性美術家たちは、同時代の抽象表現に共鳴しながら

らも、それぞれ異なる絵画的経験を探究した。画面の生成を、例えば、身体の衝動ではなく、素材や行為の反復、時間の積層としてとらえ直したのである。

よく知られる草間彌生（やう）の「インフィニティ・ネット」に見られる果てしない反復は、アクション・ペインティングが示した即興的な身振りへ応答することから生まれた。ニューヨークに渡った草間は、力強い身体的行為としての絵画に抵抗し、構図の中心を欠いた網の目の連続によって、行為を内省的な時間と感覚のリズムへと置き換えた。無限に連なる白い筆跡は、描く者の身体よりもむしろ、見る者の視線の持続を通じて画面を成立させる。

白髪富士子（しらかみ）の《作品No.1》もまた、行為の痕跡に



白髪富士子《作品 No.1》

還元できない作品である。白髪は、アクション・ペインターとして国際的に知られる白髪一雄の妻であり、彼を支えた女性として記憶されることが多い。

しかし、木板を切断し、和紙やガラス片を焼き込んだこの大作を前にすれば、その理解がいかに一面的であるかがわかる。重く、鋭利で、破壊のエネルギーを内に秘めた画面には、作家の行為を超えて素材そのものが自律的に形をつくりだす力が見える。ガラスの破片は光を反射し、見る者の身体をも巻き込みながら、作品を静かな緊張の場へと変えている。

これらの作品に共通するのは、描く行為への自覚的な取り組みと、それを一つの様式として固定することへの抵抗である。絵具や素材の振る舞い、反復のリズム、画面のスケールといった要素が、見る行為そのものに働きかけ、観客の身体に新しい経験をもたらす。そうした差異は、個々の作家の背景によってではなく、作品の内部における構造と感覚の次元で生まれている。

こうした作品を改めて見つめることは、「女性美術」という新しいカテゴリーをつくることではない。むしろ、行為や身体性を唯一の基準とせず、作品が持つ時間や空間の複層的な広がりを見つめることによって、戦後の表現がどれほど複雑で豊かな地層をなしていたかが浮かび上がる。長い間見過ごされてきた絵画の前に立つ時、私たちは創造の行為がいかに多様な形で世界とかわり得るかを、改めて感じ取ることができるだろう。

時の調べ Essay

略歴

大阪大学大学院人文学研究科准教授。国際基督教大学卒業、リイズ大学大学院修了。一橋大学大学院言語社会研究科にて博士号取得。専門は近現代美術、フェミニズム美術史、ジェンダーと視覚文化研究。著書に『増補改訂 アンチ・アクション―日本戦後絵画と女性の画家―』（ちくま学芸文庫、2025）

作品詳細

白髪富士子《作品No.1》
1961年 油彩、和紙、ガラス・カンヴァス
181・5×245・0cm
高松市美術館蔵

展覧会
概要

「アンチ・アクション
彼女たち、それぞれの応答と挑戦」
会 期：2025年12月16日（火）～2026年2月8日（日）
会 場：東京国立近代美術館 1F 企画展ギャラリー
休 館 日：月曜、12月28日～1月1日、1月13日
開館時間：10:00～17:00（金曜・土曜は20:00まで）
ウェブサイト：<https://www.momat.go.jp/exhibitions/566>